文化ファッション大学院大学ファッションクリエイション専攻　2024 年度生入試問題

＜ファッションデザインコース・ファッションテクノロジーコース共通＞

■研究計画書（試験時間 90 分）
（研究計画書は 2025 年度入試から試験時間が 60 分に変更になります。）

A4 の原稿用紙と A4 の画用紙をこちらから配布。
設問に基づき、A4 の原稿用紙に研究概要、A4 の画用紙にファッションデザイン画、または製品図を作成。
（製品図はファッションテクノロジーコース受験者のみ可。）

全期共通　研究計画書　設問
【問 1】 ファッションクリエイション専攻では院生が個々に研究計画を考え、それに基づいた研究活動と作品制作を行います。入学後 2 年間であなたが研究しようと考えている研究テーマと内容の概要を 400 字以内にまとめて書きなさい。
【問 2】 問 1 で設定した研究テーマに基づいた作品 2 体を、デザイン画※1もしくは製品図※2のいずれかで描きなさい。また、各コーディネートのアイテムごとに使用素材（素材名、加工方法等）、デザインポイント（ディテール、シルエット、パターンの特徴等）の説明を明記しなさい。画用紙は横使いとする。 ※1 デザイン画を作成する場合には鉛筆を使用すること。 ※2 製品図はファッションテクノロジーコース受験者のみ可。 製品図を作成する場合には定規と鉛筆を使用すること。

■小論文（試験時間　60 分）

出題テーマに基づき、こちらで用意した原稿用紙に小論文を作成。

Ⅰ期　小論文　出題テーマ
【問】 なぜファッションデザイナーは、新しい男性像や女性像を表現するのか。以下の文章を読んで文中からキーワードを三つ挙げ、それぞれの視点から考察し、あなたの考えを 1200 字以内で述べなさい。 （前略）6 月に開催された 24 年春夏欧州メンズコレクションは、現代の男性らしさを探る動きが強まった。ジェンダーを巡る考え方が多様化し、男性らしさの在り方も揺らいでいる時代。デザイナーがそれぞれの視点から現代における男性らしさを提起したシーズンだ。 今の時代にふさわしい男性らしさを表現したブランドのショーは、その解釈と表現の在り方の面白さが際立った。パリ・コレクションで発表した「ドリス・ヴァン・ノッテン」は、春夏コレクションのテーマを「崩されたエレガンス」と表現した。メンズワードローブの枠組みを見直して、「今日の男らしさ、現代のマスキュリニティーの新たな提案についての研究、力強さと優しさの融合」を探った。本質に関わりのない余分なものを取り除き、細くて長い、正確な新しいテーラーリングやシルエットを強調した。ハイウエストのフレアパンツ、丈の長いトレンチコート、ドレスのフォルムを思わせるシャツ、様々なメンズワードローブを見直し、再構築した。 ミラノでは「プラダ」が「フルイドフォーム」をテーマに、人の体を中心にした流動的な構築性のコレクションを見せた。シャツを起点にしながら、その構造とディテールをもとにメンズウェア全体を変容させた。シンプルでありながら、アイテムが流動するようなデザインで、従来の硬直的なテーラーリングの表現に疑問を投げかけた。厳格な男性らしさの象徴ともいえるスーツやジャケットが、軽やかに違うアイテムへ変化する。そこにも現代の男性らしさへの問題提起がある。 「コムデギャルソン」は、異形のフォルムがパワーを放つコレクションを見せた。モーニングコートのように見えたアイテムは、身頃の途中から違うジャケットがくっついている。黒いジャケットの背中には、グリーンの刺繍のジャケットがぶらりと揺れる。テーラーリングを軸にしたアイテムを集積していくことで、異なる強さを放つ瞬間を描いた。それは既存の男性らしさの象徴ともいえるテーラーリングが、解体され再構築される中で生まれる不思議なパワーだ。 現代の男性らしさを模索し、新たな価値観を提供しようとするこれらのブランドのコレクションが、強い印象を残した。ジェンダーを巡る表現が多様化する中で、男性らしさや女性らしさに新たな価値観と時代性が宿る。間もなく始まるウィメンズのデザイナーコレクションではどんな女性像が表現されるのか、注目したい。 《編集委員がお答えします》24 年春夏で印象に残ったコレクションは？／小笠原拓郎　編集委員 繊研新聞　2023.09.06 版より一部引用

Ⅱ期　小論文　出題テーマ

【問】 以下の文章を読んで、今後デザイナーや経営者は服とどう向き合っていくべきなのか、文中からキーワードを 3 つ挙げ、あなたの考えを 1200 字以内で述べなさい。

（前略）

加熱する“バズらせ“

ブランドビジネスが巨大化し、大量のスモールレザーグッズの販売がビジネスの軸となって久しい。

（中略）

ファッションショーに来場するブランドのアンバサダーやインフルエンサーと、それを取り巻く喧噪は激しさを増した。ブランド側はあらかじめ、どのセレブリティーがショーに来場するかをメディアに告知し、ハッシュタグをつけて投稿することを求めている。メディア側も投稿すれば自らのサイトがバズることが分かり、競合他社との関係でそうせざるを得ない状況。ある編集者は、「ゴシップライターのような仕事」と自虐的につぶやく。

97 年のビッグバン

パリ・コレクションの期間中、パリ市立ガリエラ・モード美術館で「1997 ファッション・ビッグバン」という展覧会が始まった。キュレーターは、97 年がファッションにとっていかに大事な年だったかを展示によって明らかにしている。

いうまでもなく、97 年といえば「コムデギャルソン」が「ボディー・ミーツ・ドレス、ドレス・ミーツ・ボディー」で、新しい美を巡る議論を巻き起こした年だ。このコレクションが展覧会のメインの一つだが、それ以外にも様々な事象が挙げられている。ジョン・ガリアーノによる「ディオール」のクチュールデビューやアレキサンダー・マックイーンによる「ジバンシィ」のクチュールデビューの年でもある。

（中略）

この展覧会を見て感じたのは、ラグジュアリーブランドは今よりもずっと服に向き合っていたということだ。デザイナーの才能に敬意を持ち、その優れた才能とブランドの持つ熟練のお針子さんの技術を合わせ、新しい美を生み出していた。それに比べると今のブランドビジネスはどうだろうか。デザイナーは次々とすげ替えられ、新しい美を探ることよりもアーカイブに忠実なコレクションを求められる。そもそものデザイナー起用においても、服作りの才能よりインフルエンサーの数が重視されているようなきらいがある。

声上げるデザイナー

秋冬のコレクションで何人かのデザイナーが興味深い発言をしている。ドリス・ヴァン・ノッテンのコレクションのキーワードは「服への愛」。服と着る人との間に生まれる親密で優しい瞬間を描いた。「原点回帰のコレクション」というのはコムデギャルソンの川久保玲。「自由なパターン、好きなファブリックを使って、スターティングポイントに帰りたい気持ち」だという。西洋のシンメトリーで伝統的な美に対する、不完全で抽象的なものが放つ美しさを描いた。コムデギャルソン創設 50 年を経たコレクションは、改めて新しい美を探る自由な精神に立ち返ったものだ。

自らの信条、哲学に立ち返り、服への愛を叫ぶデザイナーたち。しかしそれは、今のファッションビジネスが、そんな声を上げなければならない切羽詰まった状況に陥っているからでもある。服とどう向き合っていくのか、デザイナーと経営者に改めて問われている。

《小笠原拓郎の目》ラグジュアリーブランドビジネスとコレクションの変質/小笠原拓郎編集委員

繊研新聞　2023.04.11 版より一部引用